

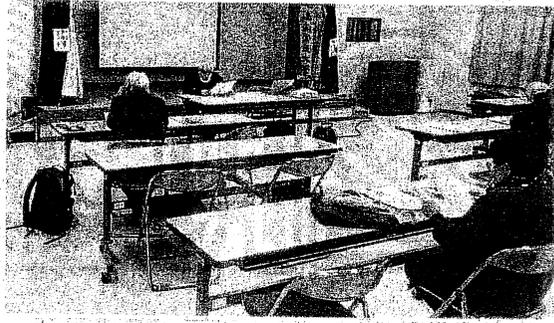
「常民大学」 故郷を学び半世紀

後藤総一郎(1933~2003)を「存じだろ」か。民俗学の祖といわれる柳田国男の研究で知られる思想史学者で、1970年代から、地域の住民が集う研究会「常民大学」を各地に発足させた。没後四半世紀近くなった今もその思いは地域で受け継がれている。

発表や討論重ね

1月下旬、長野県南部の遠山郷にある飯田市南信濃学習交流センター。午後7時少し前になると、住民が集まってきた。

「遠山常民大学」第5期の第10講。会員の一人が、遠山の民俗について記された、後藤の著書「遠山物語」の「節を音読し、その後、飯田市美術館学芸員の近藤大知さんが「赤い病魔史 補遺」と題して、明治と昭和に遠山で流行した感染症などについて発表する。最後に遠山常民大学事務局長の榎井弘人さんの司会で、戦後の遠山の医療について、参加者全員が記憶を掘り起こしつつ、討論を重ねた。「始まったときからはほぼ同じやり方。何かをきっかけに、地域について自ら着ることに意味があるんです」と榎井さん。



1月に開かれた「遠山常民大学」。会場前方の文字は後藤総一郎によるもの＝長野県飯田市

高齢化、解散する地域も 新たな形を模索

村(現在は飯田市)の村史編集に携わったのをきっかけに始めた。会の名は柳田が「普通の生活者」を指して言った「常民」から。その後、研究会の活動は、南信濃と同じ天竜川沿いの静岡県磐田市、自宅を構えていた神奈川県鎌倉市、若手県遠野市などへと広がる。最盛期には10前後の団体が併存した。

後藤が明治大学で教えたころの同僚で、常民大学に関する研究書を残した北田耕也(故人)は「常民大学の学びの方法は戦後日本の民衆がつくって来た(略)共同学習、系統的学習、地域に根ざした学習を総合したもの」と評した。

研究会の一つ「鎌倉柳田学舎」で事務局を務める曾原系子さんによると、年に一度、各地の常民大学のメンバーが集まって合同研究会を行うのが決まりで「後藤先生が亡くなってからも含め、これまでに30回以上開催した」という。成果は十数冊の「常民大学研究紀要」などに結実している。

だが、発足から半世紀近くが過ぎ、活動にはきしむも生じている。

81年創立の「遠州常民文化談話会」(静岡県磐田市)は年に7~8回集まって、柳田国男の「遠野物語」などを回読しているが、「集まるのは15人くらい。発足時に中心となった世代がそのまま年をとってしまった感じ」と代表の名倉慎一郎さんは話す。

鎌倉柳田学舎も同様の悩みを抱える。代表の久保田宏さんによると、会員は16人で、市生涯学習センターに月1度集まり、

柳田の著作を読んでいるが、「30代の会員もいるのですが、新しい人はなかなか入ってこない」と話す。

86年設立の「遠野常民大学」(岩手県遠野市)のように、一時は「NPO法人遠野物語研究所」として発展したものの、やはり会員の高齢化が主因で解散を余儀なくされたところも。

最も古い歴史を誇る遠山常民大学運営委員会会長の針間道夫さんも「若い会員もいるんだが、地域での関心はいまひとつ。来年度あたりが一つの節目かなとも思っています」と語る。

専門家招き講演

一方、後藤の流れとは別に新たな「常民大学」も立ち上がっている。茨城県つくば市で月に一度開催されている「つくば常民大学」は2021年開講。民俗学者で神奈川大学名誉教授の佐野賢治さんが大学を定年後、自宅近くの市交流センターで始めた。「戦争を語り継ぐ」「ここから来た」などをテーマに、様々な専門家に語ってもらう。19日には、筑波大名誉教授の松本浩一さんが「道教と気万物を生み出すエネルギー」と題して話した。

「柳田国男は、民俗学は人間社会全体の幸福実現に資することを旨とする学問であり、そのためには、それぞれの民族の生活や民俗文化を理解する必要がある」と語っていた」と佐野さんは指摘する。「つくばは都市と農村が入りまじり、外国人をはじめとする研究者や留学生の多い町。その土地柄を生かし、地元の人々の話から異文化論まで聞ける。新たな常民大学の形を模索していきたい」

(編集委員・高代栄一)